

現代詩集

67

日本文学全集



現代詩集

日本文学全集 67

日本文学全集 67 現代詩集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 金子光晴
表

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文監版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

現代詩集 目次

伊良子清白

北園克衛

孔雀船……………五

円錐詩集……………三五

蒲原有明

伊東靜雄

有明集……………三

わがひとに与ふる哀歌……………三〇

山村暮鳥

大手拓次

雲……………七

藍色の墓……………二四三

萩原恭次郎

立原道造

死刑宣告……………一五

萱草に寄す……………二六三

富永太郎

中原中也

富永太郎詩集……………一五

在りし日の歌……………二六八

安西冬衛

草野心平

軍艦茉莉……………一〇

蛙……………三〇三

北川冬彦

村野四郎

戦争……………三二

体操詩集……………三五

小熊秀雄

哀憐詩集……………三三

金子光晴

蛾……………四〇

吉田一穂

暗星系……………三七

竹内勝太郎

黒豹……………三六

吉岡 實

静物……………四三

年譜……………四六

解説……………篠田一士 四六

鮎川信夫

橋上の人……………四四

田村隆一

四千の日と夜……………四六

安東次男

CALENDRIER ……四四

入澤康夫

季節についての試論……………四三

現代詩集

孔雀船

故郷に眠る母の霊に

伊良子清白

漂泊

蕭戸に

秋風吹いて

河添の旅籠屋さびし

哀れなる旅の男は

夕暮の空を眺めて

いと低く歌ひはじめぬ

亡母は

処女と成りて

白き額月に現はれ

亡父は

童子となりて

円き肩銀河を渡る

柳洩る

夜の河白く

河越えて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて

旅人の胸に触れたり

故郷の

谷間の歌は

続きつゝ断えつゝ哀し

大空の返響の音と

地の底のうめきの声と

交りて調は深し

旅人に

母はやどりぬ

若人に

父は降り

小野の笛煙の中に

かすかなる節は残れり

旅人は

歌ひ続けぬ

嬰子の昔にかへり

微笑みて歌ひつゝあり

淡路にて

古翁しま国の

野にまじり覆盆子摘み

門に来て生鈴の

百層を騎りよぶ

白晶の皿をうけ

鮮けき乳を瀧ぐ

六月の飲食に

けたゝまし虹走る

清源の里いでゝ

松に行き松に去る

大海のすなどりは
ちぎれたり絵巻物

鳴門の子海の幸

魚の腹を胸肉に
おしあてゝ見よ十人

同音にのぼり来る

秋和の里

月に沈める白菊の

秋冷まじき影を見て

千曲少女のたましひの

ぬけかいでたるこゝちせる

佐久の平の片ほとり

あきわの里に霜やおく

酒うる家のさゞめきに

まじる夕の鴈の声

蓼科山の彼方にぞ

年経るおろち棲むといへ

月はろくとうかびいで

八谷の奥も照らすかな

旅路はるけくさまよへば
破れし衣の寒けきに
こよひ朗らのそらにして
いとゞし心痛むかな

旅行く人に

雨の渡に

順礼の

姿寂びしき
夕間暮

霧の山路に

駕昇の

かけ声高き
朝朗

旅は興ある

頭陀袋

重きを土産に
帰れ君

悪魔木暗に

ひそみつゝ
人の財を

ねらふとも

天女泉に

下り立ちて

小瓶洗ふも

目に入らむ

山蛭膚に

吸ひ入らば

谷に薬水

溢るべく

船酔海に

苦しむも

竜神臓を

医すべし

鳥の尸に

火は燃えて

山に地獄の

吹噓いふく声

潮うしほに異香

薰かほすれば
海に微妙みまうの

蜃氣樓しんきろう

暮くれて駅うまやの

町まちに入り
旅籠はたしの門かどを

くゞる時

米よねの玄くろきに

驚おどろきて

里さとに都みやこを

説はなく勿なれ

女房語部にようごたて

背せすりて

村の歴史れきしを

講こうすべく

主膳夫あるじかしほで

雉子けしを獲えて

旨あつものき羹

とゝのへむ

芭蕉わらわの草鞋

ふみしめて

円位えんゐの笠かさを

頂いただきげば

風俗君ふうそくきみの

鹿島立しかしまだち

翁おきなさびたる

可笑おかしさよ

島

黒潮くろしほの流ながれて奔はしる
沖中おきななかに漂ただよふ島は

眠ねむりたる巨人きょじんならずや
頭かしらのみ波なみに出でして

峨々かまなとして岩重いわかされば
目や鼻や顔何なぞ奇あまなる

裸々として樹を被らず
聳えたる頂高し

鳥啼くも魚群れ飛ぶも
雨降るも日の出入るも

青空も大海原も

春と夏秋と冬とも

眠りたる巨人は知らず
幾千年頑たり愕たり

海の声

いさゝむら竹打戦ぐ
丘の径の果にして
くねり可笑しくつら／＼に
しげるいそべの磯馴松

花も紅葉もなければ
千鳥あそべるいさごちの
渚に近く下り立てば

沈みて青き海の石

貝や拾はん莫告藻や

摘まんといひしそのかみの

歌をうたひて真玉なす

いさごのうへをあゆみけり

波と波とのかさなりて

砂と砂とのうちふれて

流れさゞらく声きくに

いせをの蟹が耳馴れし

音としもこそおぼえざれ

社をよぎり寺をすぎ

鈴振り鳴らし鐘をつき

海の小琴にあはするに

澄みてかなしき篇となる

御座の湾西の方

和具の細戸に船泛けて

布施田の里や青波の

潮を渡る蟹の児等

われその船を泛べばや

われその水を渡らばや
しかずしなづ纜しなづ解とき放ち
今日は和子わこが伴ともたらん

見みずやとも辺へに越こ賀がの松
見みずやへさきに青の峰
ゆたのたゆたのたゆたひに
潮しほの和なみぞはかられぬ

和みは潮のそれのみか
日は麗うつくらかに志摩しまの国
空に黄金こがねや集あふらん
風は長閑のどかに英虞えよの山
花や県かたをよぎるらん

よしそれとても海士かいしの子が
歌うたはずば詮しんぞなき
歌ひてすぐる入海いりうみの
さし出の岩もほゝゑまん

言葉すくなき入海の
波こそ君きみの友ならめ
大海原おほうみの男おとこのこらは
あまの少女せうにょは江の水に

さても纜かの衣ころもならで
船路間ふねぢ近き藻もの被衣かき
女をだてらに水底みづそこの
黄泉国よみくににも通ふらむ

黄泉よみの醜女しこめは嫉妬わだかあり
阿古屋あぐらの貝かいを敷しき列りね
顔美かみき子等こらを誘さそひて
岩いの櫃ひつもつくるらん

されば海うみなる底そこひには
父も沈しづみぬちゝのみの
母も伏ふしぬ柞葉はさはの
生れ乍はらに水潜みづかる
歌のふしもやさとるらん

櫛かみも捨てたり砂浜さひらに
簪かんざしも折りぬ岩角いわかくに
黒く沈しづめる眼めのうちに
映うつるは海の泥どろのみ

若わかきが膚かわも潮沫しほなまの
触ふるゝに早く任まかせけむ

いは間にくつる捨鉤
それだに里の懐しき

哀歌をあげぬ海なれば
花草船を流れすぎ
をとめの群も船の子が
袖にかくるゝ秋の夢

夢なればこそ千尋なす
海的那こひも見ゆるなれ
それその石の円くして
白きは星の果ならん

いまし蟹の子臍拍子の
など乱声にきこゆるや
われ今海をうかがふに
とくなが顔は蒼みたり

ゆるさせたまへ都人
きみのまなこは朗らかに
いかなる海も射貫くらん
伝へきくらく此海に
男のかげのさすときは
かへらず消えず潜女の

深き業とぞ怖れたる

われ微笑にたへやらず
肩を叩いて童形の

神に翼を疑ひし
それもゆめとやいふべけん

島こそ浮べくろゝと

この入海の島なれば
いつ羽衣の落ち沈み
飛ばず翔らず成りぬらむ

見れば紫日を帯びて
陽炎ひわたる玉のつや
つや／＼われはうけひかざり
あまりに軽き姿かな

白ら松原小貝浜
泊つるや小舟船越の

昔は汐も通ひけむ
これや月日の破壊ならん

潮のひきたる煌砂
うみの子ならで誰かまた

かゝる汀に灰白き
鏡ありとや思ふべき

大海原と入海と
こゝに迫りて海神が
こゝろなぐさや手すさびや
陸を細めし蟹の業

今細雲の曳き渡し
紀路は遙けし三熊野や
白木綿咲ける海岸に
落つると見ゆる夕日かな

夏日孔雀賦

園の主に導かれ
庭の置石燈籠
物古る木立築山の
景有る所うち過ぎて
池のほとりを来て見れば
棚につくれる藤の花
紫深き彩雲の
陰にかくるゝ鳥屋にして

番の孔雀砂を踏み
優なる姿陸るゝよ

地に曳く尾羽の重くして
歩はおそき雄の孔雀
雌鳥を見れば嬌やかに
柔和の性は具ふれど
綾に包める毛衣に
己れ眩き風情あり

雌鳥雄鳥の立並び
砂にいざよふ影と影
飾り乏き身を恥ぢて
雌鳥は少し退けり
落羽は見えず砂の上
清く掃きたる園守が
箒の痕も失せやらず
一つ落ち散る藤浪の
花を啄む雄の孔雀
長き花総地に垂れて
歩めば遠し砂原
見よ君来れ雄の孔雀
尾羽拡ぐるよあなや今
あな拡げたりことごとく

こゝろ籠めたる武士の
 晴の鎧に似たるかな
 花の宴宮内の
 桜襲のごときかな

一つの尾羽をながむれば
 右と左にたち別れ
 みだれて靡く細羽の
 金糸の縫を捌くかな
 円く張りたる尾の上に
 円くおかるゝ斑を見れば
 雲の峯湧く夏の日に
 炎は燃ゆる日輪の
 半ば蝕する影の如
 さても面は濃やかに
 げに天鷲絨の軟かき
 これや触れても見まほしの
 指に空しき心地せむ

いとゞ和毛のゆたかにて
 胸を纏へる光輝と
 紫深き羽衣は
 紺地の紙に金泥の
 文字を透すが如くなり
 冠に立てる二本の

羽は何物直にして
 位を示す名鳥の
 これ頂の飾なり

身はいと小さく尾は広く
 盛なるかな真白なる
 砂の面を歩み行く
 君それ砂といふ勿れ
 この鳥影を成す所
 妙の光を眼にせずや
 仰げば深し藤の棚
 王者にかざす覆蓋の
 形に通ふかしこさよ
 四方に張りたる尾の羽の
 めぐりはまとふ薄霞
 もとより鳥屋のものなれど
 鳥屋より広く見ゆるかな

何事ぞこれ円らかに
 張れる尾羽より風出でゝ
 見よ漣の寄るごとく
 羽と羽とを疾くぞ過ぐ
 天つ錦の羽の戦ぎ
 香りの草はふまずとも
 香らざらめやその和毛

八百重の雲は飛ばずとも
 響かざらめやその羽がひ
 獅子よ空しき洞をいで
 小暗き森の巖角に
 その鬣をうち振ふ
 猛き姿もなにかせむ
 驚よ御空を高く飛び
 日の行く道の縦横に
 貫く羽を搏ち羽ぶく
 雄々しき影もなにかせむ
 誰か知るべき花蔭に
 鳥の姿をながめ見て
 朽ちず亡びず価ある
 永久の光に入りぬとは
 誰か知るべきこゝろなく
 庭逍遙の目に触れて
 孔雀の鳥屋の人の世に
 高き示しを与ふとは
 時は滅びよ日は逝けよ
 形は消えよ世は失せよ
 其処に残れるものありて
 限りも知らず極みなく
 輝き渡る様を見む
 今われ仮りにそのものを

美しとのみ名け得る
 振放け見れば大空の
 日は午に中たり雨の
 高き雲間に宿りけり
 織りて隙なき藤浪の
 影は幾重に匂へども
 紅燃ゆる天津日の
 焰はあまり強くして
 梭の飛び交ひ箭と乱れ
 銀より白き穂を投げて
 これや孔雀の尾の上に
 盤渦巻きかへり迸り
 或は露と溢れ零ち
 或は霜とおき結び
 彼処に此処に戯るゝ
 千々の日影のたゞずまひ
 深き浅きの差異さへ
 色薄尾羽にあらはれて
 涌来る彩の幽かにも
 末は朧に見ゆれども
 尽きぬ光の泉より
 ひまなく灌ぐ金の波
 と見るに近き池の水